

# 詐欺映画「主戦場」の正体

－外国特派員協会(FCCJ)試写会の報告－

2019年4月8日

(9月14日改題)

テキサス親父日本事務局

藤木 俊一

4月4日に外国人特派員協会(FCCJ)にて行われた慰安婦問題のドキュメンタリー「主戦場」(上映時間2時間2分)の試写会&記者会見に、私、藤木俊一は、高橋史朗麗澤大学教授に誘われて参加した。

会場には約100名ほどの報道陣、その他の参加者が来ており、その半数を少し越えた位が、白人であり、残りが日本人という参加者の構成であった。

この1週間ほど前に、私とケント・ギルバート氏が食事をした際に、ケント氏が試写会を見て来たとの事で、「とにかく酷い」「見るに値しない」と憤慨していた。

## ・このフィルム制作の手法

私が見た全体を通しての感想は、米国のいわゆるフェイクニュースの代表であるCNNなどと同じ手法でこのドキュメンタリーが作られているということ。フィルム全体が、切り取りと歪曲、捏造だらけである。我々が受けたインタビューの一部のみを切り出し、そこを徹底的に反証させるというやり方である。それに、慰安婦問題の核の論争に触っているようで、実際には結論を有耶無耶にして、我々に単に「レッテル貼り」をして貶めるといふ古典的な手法であった。

例えば、テキサス親父(トニー・マラーノ氏)がインタビューを受けた際に「米国の公文書に、慰安婦たちは日本人の基準でも、白人の基準でも魅力的ではなかった(=不細工という意味)と書いてあったので、米国・グレンデール市の慰安婦像に紙袋を被せた。これは、俺が言ったことではなく、米国の公文書に書いてある事であり、文句が

あるなら俺ではなく、米国政府に言ってくれ」とインタビューの際に発言した中の「慰安婦は不細工だったので紙袋を被せた」とのみフィルムの中では表現していた。完全に切り取り、捏造である。さらには、テキサス親父がYouTubeに投稿していた慰安婦問題関連の動画2本を許可無く「商業映画」の中で使っている。これは、明らかな著作権侵害である。

私との2016年9月のやり取りでは、「フィルムが完成したら公開前に私に見せ、意図と違う使い方をされている場合は、フィルムの最後のクレジット部分に、私が主張すること全てを掲載する」と約している。しかし、その2年後の2018年9月に突然、「残念ですが、(フィルムの)内容の漏洩の可能性、および著作権の関係で見せられない」とのメールが送られてきた。

他人の著作権は簡単に侵すが、自分の著作権は守るというデザキ氏の異常な姿勢が見て取れる。

このフィルムの中で、終始この手法が使われており、我々側からは反論ができないように我々のインタビューの順番を意図的に先に持ってきている。

(この場合の「我々」とは、加瀬英明氏、ケント・ギルバート氏、櫻井よしこ氏、杉田水脈氏、トニー・マラーノ氏、藤岡信勝氏、藤木俊一、山本優美子氏、)五十音順

フィルムの初めの段階で、藤岡信勝氏、杉田水脈氏、ケント・ギルバート氏、私、そして、トニー・マラーノ氏(写真左からの順)の写真をならべ、その上に「リビジョニスト(歴史修正主義者)」、「ディナイアリスト(否定主義者)」と、ちょうど米国などにある「WANTED」という指名手配写真のような画像をスクリーンいっぱいに写しだしレッテル貼りがなされていた。

その後も、「ライト・ウインガー(右翼)」、「コンフォート・ウーマン・ディナイアー(慰安婦否定者)」、「セクシスト(性差別主義者)」などとの一方的なレッテル貼りがフィルムのアちこちで行われており、「学術的な倫理が要求されるので公平に扱う」と我々全員に説明していたデザキ氏は、「上智大学の看板」を悪用し、「学術研究」を語ったことは、明らかな虚偽の説明をしたということになる。悪質な印象操作であり、冒頭

で視聴者に対して、我々がいかにも悪人たちであるかのごとくレッテルを貼って見せているのである。

### ＜監督デザキの記者会見での発言から分かった事＞

全編の上映の後に制作者のデザキ・ミキネ氏の記者会見があり、その日、私が始めて見たこのドキュメンタリーフィルムそのものからと、その直後のデザキ氏自身の記者会見での発言から、以下の事が確認できた。

#### 1. スタッフの国籍：

アシスタント・プロデューサーが韓国人である。（デザキ本人の記者会見での発言）

#### 2. インタビューの順序：

「慰安婦は高給取りの売春婦であった」とする我々側のインタビューを先に行い、「慰安婦は性奴隷であった」とする日本の左翼や米国・韓国・朝鮮人に見せた上で、それに関して、一方的に反論させるといふ、卑怯な手法を使っていたことがわかった。「慰安婦は性奴隷だった」とする側のみにも一方的に反証の機会を与え、我々には一切の反論の機会を与えずに、我々の発言を切り取って、意図的に悪用したものに過ぎない。無抵抗な相手に対する集団リンチと同様である。

#### 3. 登場人物の比率：

登場する「学者の数」であるが、左翼・朝鮮人側は、吉見義明氏、小林節氏、その他の学者へのインタビューがあったが、こちら側は、藤岡信勝氏のみであった。西岡力氏、秦郁彦氏など、慰安婦問題が起きた 1990 年初頭から調査を行って来ている学者のインタビューは、藤岡氏を除き一切なかった。

また、全体の出演者の数も、我々側が8人に対し、日本の左翼・米国・韓国・朝鮮人側が18人と、一方的であり、完全にバランスを欠いている。（この場合、朴裕河氏は中立と見る）これも、まるで、無抵抗な相手に対する集団リンチである。

#### 4. 加瀬英明氏への批判と諸団体への批判：

「様々な慰安婦関連の歴史修正主義者たち側の団体を調べると、ほとんどの団体の代表が加瀬英明氏である」とのナレーションがあり、（これは事実と反している＝捏造）、その後に加瀬英明氏にインタビューをしているシーンがあった。そのインタビューの内容は「吉見義明氏の本は読んだことがありますか？」というもので、加瀬氏は「誰それ？」と返答。加瀬氏が、吉見氏を知らないはずがないが、デザキ氏の的外れな質問に、意図的に「誰それ？」と返したのは、我々側の人間であれば、明らかである。

「秦郁彦氏の本は？」とも聞かれ、「私は他人が書いた本は読まないから知らない」と返答し、会場の白人、約10人ほどが、軽蔑したように大声で笑っていた。加瀬氏が知らないと思っている時点で、デザキ氏は何も知らないことをさらけ出しているのである。

この結果、完全に加瀬英明氏が「ピエロ」に仕立て上げられており、加瀬氏が代表を務める多くの団体の信用を一気に崩すという手法が使われていた。誠に狡猾である。

#### 5. 虚偽による団体への攻撃：

日本会議、神社本庁、靖國神社などに対する根も葉もない攻撃、安倍首相批判などは、完全に従来の日本の左翼や、支那、朝鮮の主張と同様で、慰安婦問題に無関係な沖縄の基地問題、日本の軍備に関する内容にまで及び、日本叩きを展開。日本会議は、「明治憲法に戻そうとしている」など、根も葉もない事をデザキ氏本人が、ナレーションで語っている。日本会議に照会したが、その様なことはあり得ないとの事。

さらに、日本の首相の靖國参拝に関し、「靖國神社は宗教法人であり、アーリントン墓地は国立であることから、米国大統領が国立アーリントン墓地に行くのとは異なる」との解説が入っていた。共産党員のような理由付けである。

## 6. 目良氏への個人攻撃：

目良浩一氏のサンフランシスコ市議会での発言の後の1人の市議の「Shame on You!」の連続を殊更に強調し、一方的な印象操作を行っていた。この場面でも、記者会見会場の白人の10名ほどが、目良氏に対して文句を言い、嘲笑する態度をとっていた。

## 7. 自分に対する攻撃へのリベンジ：

デザキ氏は、6年ほど前に当時、少々、ネット上で炎上した「Racism in Japan (日本には人種差別がありますか?)」という動画をYouTubeに投稿していた。デザキ氏は、なぜ、自分が当時、強い非難に晒されたのかをいまだに理解出来ていないようである。

この動画は、今回の「主戦場」同様に、デザキ氏の日本に関する無知から来た炎上だったのだが、本人は、自分の無知を反省するのではなく、その動画を非難していた日本人を総じて「右翼」や「歴史修正主義者」と決めつけたのだ。

当時、デザキ氏は糸満高校でALT (アシスタント・ランゲージ・ティーチャー=英語の補助教員) をしており、一部のネットユーザーが、この職場へ抗議の電話等を行ったとデザキ氏は言っていた。

このデザキ氏への抗議に対する「復讐」のために作られたのが、この「主戦場」であることは容易に想像できる。

デザキ氏は、自らを「慰安婦の嘘」をいくつもの記事にした元朝日新聞の植村隆記者とダブらせていたのだ。植村元記者の就職先である北海道の北星学園大学へ、この植村元記者の過去の数々の記事で「日本人の名誉が世界的に傷付けられた」と考えた日本国民が抗議し、結果として解雇された境遇と重ね合わせ、自分も「歴史修正主義者」や「右翼」の『被害者』であるという意識が芽生えてきたようである。

デザキ氏は、自らが製作した「デザキ氏の無知から来る日本観」、「米国で受けた米国の歴史観」を裏取りもせず薄弱的知識で作ったYouTubeの動画に対する反省など一切な

いどころか、被害者になりすます時点で、慰安婦マフィアたちと同じメンタリティであり、当初から、このフィルムでリベンジ（復讐）を行おうとしていたことが読み取れた。

#### **8. 会場に詰めかけた反日白人達のリアクション：**

このフィルムは、藤岡信勝氏、杉田水脈氏、ケント・ギルバート氏、トニー・マラーノ氏、櫻井よしこ氏、加瀬英明氏、山本優美子氏、そして私に、先にインタビューをし、それに対して左翼が反論を行っているので、完全に「一方通行」の内容となっており、各場面で（強制か否か、高給取りだったか否かなど）左翼・韓国・朝鮮人・反日米国人たちが、我々側の発言を証拠も無しに言葉だけで覆した部分で終わっており、その度に、会場の白人たちが大歓声を上げるという異様な雰囲気の写真会であった。

例えば、「高給取りであった」と、我々サイドの発言があった後に、ミャンマーでの当時の「インフレ率」を持ち出して、「実際の価値は、額面の1800分の1の価値しかなかったのでリビジョニストという事は嘘である」という部分で切られている。そうすると、会場の白人からは歓声と拍手が湧くという具合であった。

しかし、ミャンマーのインフレ率に関する一次資料などは、一切、示されていない。まさに慰安婦たちの「証拠がない証言」を鵜呑みにする人たちらしい思考回路である。たとえば、そのインフレが事実であったとしても、慰安婦たちには、円貨の「軍票」にて支払われており、それを預金通帳に入れる事もできていたのは、当時の様々な証拠をみれば明らかであり、日本や朝鮮半島に送金するに当たっては、ミャンマーのインフレなど一切関係ない。その送金で、朝鮮半島の家族は、借金の返済をしたり、田畑を買ったりしたのであるが、デザキ氏は、我々のこのような反論をする機会を意図的に作らなかったのである。

さらに、慰安婦の女性が、「本人名義で預金通帳を作っていた」という事自体、当時の西洋諸国では考えられない程に、日本の女性の権利が守られていた事に関しては、私がインタビューで話をしたにもかかわらず、一切、言及していない。世界の多くの国々では、1960年代、70年代まで女性が銀行口座などを作る場合や外出する際は、配偶者の許可が必要であったことなど、この無知のデザキ氏には想像も出来なかったのであろう。

## ・この他に非常に問題がある部分

### A. ノーマン・ミキネ・デザキ（出崎幹根）とは：

このデザキ・ミキネという人物は、約6年前に「語学指導等を行う外国青年招致事業」JET Programme (The Japan Exchange and Teaching Programme) で来日し、ALR（英語補助教師）として中学校や高校で英語を教えていた。

その間に「Medama Sensei めだませんせい」というYouTubeアカウントで、「Racism in Japan 日本では人種差別がありますか？」というデザキ氏の中途半端な知識で、日本を貶めるための動画を投稿し炎上させたという経歴がある。

これが、完全に偏見に満ちた動画で、人種差別のひとつの例として、「バカチョンカメラ」が上げられている。物事を知らないにも程がある。完全に被害者ビジネスの朝鮮人のこじつけを盲信した結果であろう。

この結果、デザキ氏が務める学校へ、多くの抗議の電話やファックスが全国から送られたとのこと。これが、元朝日新聞の植村隆氏の慰安婦問題の捏造記事の関して、北星学園大学へ同様のことが行われたこととダブって見えたのだ。

### B. デザキ氏の主張：

このデザキ氏への攻撃を行ったとしているのが、日本の「右翼」や「歴史修正主義者」たちで、自分は言論の自由を守るために屈しなかったと本人が言っていた。

その後、1年間、タイに行って僧侶になるための修行を行い、僧侶になったとの事。（たった1年の修行で僧侶になれるのか？日本語が流暢なデザキ氏が、日本の寺ではなく、なぜ、タイに行ったのか疑問が残る。）

### C. デザキ氏からの私へのアプローチ：

2016年6月に私も執筆者の1人として関わった『国連が世界に広めた「慰安婦=性奴隷」の嘘—ジュネーブ国連派遣団報告「慰安婦の真実国民運動」』の出版発表会を中野サンプラザにて開催したのだが、その時にデザキ氏より、「現在、上智大学で研究をしております、卒業研究で慰安婦問題を取りあげたいので、インタビューに協力して欲しい」との申し出があった。テキサス親父（トニー・マラーノ氏）と、私に対してインタビューしたいとの事であった。

#### **D. デザキ氏の当初の嘘：**

あくまで、「卒業研究」であり、学術的な見地と倫理が必要なために、公平な立場で取材をするとのことだったので、私の発言の「切り取り」や「歪曲」をしないとの条件であれば受けても良いと承諾した。学生に「協力して欲しい」と言われれば、よほどの事情が無い限り、善意での協力をするを見越し、悪用したということである。

#### **E. インタビューの時期：**

私は、2016年9月にテキサス親父日本事務局事務所内でインタビューを受け、トニー氏は、2017年1月の来日の際にトニー氏と私で、上智大学に車で出向き、教室内でインタビューを受けた。

#### **F. フィルムの構成：**

内容は、切り取りを基にして、我々側の出演者たちを「リビジョニスト」「ディナイアリスト」その他、様々なレッテル貼りをして、嘲笑の対象にするという構成になっている。

#### **G. 日本会議と安倍首相への虚偽による批判：**

日本会議に関しても、憶測を基にした事実と完全に反する内容が語られており、日本会議が訴訟を起こしてもおかしくないと思える内容であった。これには、日本会議のメンバーである一緒に試写会・記者会見に行った高橋史朗教授もかなりご立腹であった。

実際のフィルムが手に入れば、詳細に分析し、反論と訴訟の両面での反撃が可能である  
と考えるが、現時点では、試写会のみであるので、非常に難しい。

#### **H. 資金面での疑惑：**

アシスタント・プロデューサーが韓国人であること、キックstarter（クラウドファンディング）では、260万円しか集まっていないこと、この260万円（実際には手数料を引くと230万円）で、3年間を制作一本に費やしたこと、釜山の映画祭で最初に上映したことを考えれば、韓国政府や日本基督教団から支援を受けている、挺対協（韓国挺身隊問題対策協議会）（現在の正義連＝日本軍性奴隷制問題解決のための正義記憶連帯）または、国連慰安婦を性奴隷と言い換えた戸塚悦郎（当時弁護士）がエージェントを務めるとされる中国系の「世界抗日連合」（＝世界抗日戦争史実維護連合会）の様な団体が、このデザキ氏の生活や収入を保証したとしてもおかしくはないだろう。

#### **I. 複数のバージョンの存在疑惑：**

一部の関係者の情報によれば、釜山の映画祭で上映されたバージョンと日本で公開されたバージョンには、いくつかの部分で異なっているとのこと。これが事実であれば、複数のバージョンが存在していることになる。

#### **J. WAM**

このフィルム内で「アクティブ・ミュージアム 女たちの戦争と平和資料館（WAM）」の渡辺美奈氏は、「1億円貰っても、性奴隷は性奴隷だと思います」と言っていた。話は、憲法改正にまでおよび、護憲論者の意見が紹介され、さらに最後には憲法改正に反対するという内容で締めくくられており、慰安婦とはかけ離れた内容で、ドキュメンタリーと銘打っているが、単なる反日左翼の「低質なプロパガンダフィルム」であり、ユーチューブに趣味で掲載する程度の間違っててもドキュメンタリー言える作品ではない。

#### **K. フィルムの中のデザキ氏本人の発言：**

「公正なドキュメンタリー」と銘打ったが、実際には、フィルム随所にデザキ氏本人の印象操作のためのナレーションが挿入されており、そこにデザキ氏自身の偏った意見をちりばめ、聴衆を誘導している。例えば、「改憲して軍隊を持つと戦争になる」と、共産党員同様な意見を述べている。

また、我々側を当て馬に使うことを初めから画策していたという事がわかるのは、我々の出演時間と反対側の出演時間に大きな差を見るだけでも理解出来る。

フィルム全体を通して、我々の主張を永遠と左翼学者や活動家に反論させるというスタイルであるので、当然、左翼側の出演時間が10倍ほどあるのではないかと言うくらいに長い。

#### **L. 欧州の日本領事館に関与**

デザキ氏が欧州の大学で試写会を行うときに、デザキ氏に対して欧州の領事館が「私に接触をはかってきた」と発言している。国名、大学名、領事館名などは、明らかにされていないが、この問題を日本政府がコントロールし、我々がそれに基づいて動いているとの完全に間違った「印象操作」を行っている。

#### **M. 教科書問題に言及**

国連等で活動している左翼の活動家が多く取りあげる「日本の歴史教科書」に関する問題に言及している。中学生の歴史教科書に以前は慰安婦問題の記載があったが、ある時期以降、日本政府の圧力により慰安婦問題が教科書から消えた。「日本政府が検閲を行っている」というような左翼独特の「印象操作」がなされている。

また、カリフォルニア州の11年生の教科書に慰安婦問題が追加されることが決定された際に、日本政府がマグロウヒル社に対して抗議を、歴史を歪曲しようとしているという「印象操作」を行っていた。

## N. 上智大学の中野晃一教授との関係

中野晃一氏は、『平成31年4月14日に【戦争をさせない1000人委員会・立憲フォーラム】安倍政治を終わらせよう！4.19院内集会』において、このフィルムに関して次のように述べている。

「私はこの映画に出ているだけではなくて、私の教え子でして、修士の院生だったんですね。オリジナルカットのものが、あの、修士論文に代わる学位を取るための制作物で、えー、ちょっと変わってるんですよ。こう言うのをやりたいと言って、面白いことを考えるなどですね。それで、こう言う人たちをインタビューしたいと言って、本当にインタビューしちゃって、本当にビックリしたんですけれども、なかなか、こう、あのー、この右翼側を含めて凄いメンバーになっていますので・・・中略・・・元々ユーチューバーで動画を載せていた経験はあるのですけれども、そんな彼がですね、作りました。それで、あのー、韓国にも取材に行って、アメリカでも取材をして、英語版、日本語版、韓国語版を作って、えー、釜山の映画祭で、昨年ですね、えー、正式に招待をされて出して、えー、明日から、東京ではイメージフォーラムという渋谷と青山の間くらいですかね、映画館で上映が始まることになっています。映画の組み立てとしては、いわゆる歴史修正主義者ですね、まっ、その、あのー、色んな事を言っている人たちと、それと、あのー、林先生であるとか、吉見先生であるとか、あるいは、渡辺美奈さんとかですね、まあ、専門家の方で、色々調べてこられた方が、次々と出てくる感じなんですけれども、で、まあ、あの、見た人に自分で判断して下さいと言う仕掛けになっているんですが、まー、正直申し上げて、やっぱり、あのー、あの人が言っている事を聞いていると、どんどん、自分で墓穴を掘っていると、奇妙な面白味があったりして、なかなか、この顔見ると苦痛だなという人たちが出てくるんですけど、如何に荒唐無稽で馬鹿げたことを言っているのかという、ま、今になって騙されたただ何だとか言っているんですけど、全部、自分が喋っている話なんです。で、自分で話している話で如何に、こう、デタラメなのかと言うのが、色々、こう、見えてくると言うような仕掛けになっていますので、2時間が割とあっという間に過ぎるっていう風に思いますから、是非、近いところからご覧いただけたらと思います。慰安婦問題は海外では韓国に限らず、人権の問題、女性の権利を侵害した戦時性暴力の重大な問題であるということと理解されていて、そういう意味で、単なる歴史問題ではなく、今も続く政治問題であり人権問題であるとの理解がされている訳ですが、残念ながら日本においては、ほとんどの人は何も知らない、えー、場合によっては本当にあのー、歴史修正主義で、まあ、あのー、色んな形で、色んなところでまき散らされている、間違

った知識というものが広まっちゃっているというのが現実だという風に思いますので、この部分で私達が後を持つということをしていかなければ、なかなかこの先はないかなと言う風に思っています。」

#### ・ 関連記事

韓国・中央日報

<https://japanese.joins.com/article/299/252299.html>

朝鮮日報

<http://chosonsinbo.com/jp/2019/04/hj1904112/>

沖縄タイムス

<https://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/408020>

中日新聞

<https://www.chunichi.co.jp/s/article/2019041201001008.html>

上毛新聞

<https://www.jomo-news.co.jp/news/domestic/culture/124495>

時事通信

[https://www.jiji.com/jc/article?k=20190412\\_252299&g=cnp](https://www.jiji.com/jc/article?k=20190412_252299&g=cnp)

共同通信

<https://this.kiji.is/489179515886486625?c=39546741839462401>

シネマカフェネット

<https://www.cinemacafe.net/movies/29211/>

#### ・ 登場人物その他

監督・脚本・撮影・編集・ナレーション：ミキ・デザキ  
プロデューサー：ミキ・デザキ ハタ・モモコ  
アソシエイトプロデューサー：カン・ミョンソク

音楽：オダカ・マサタカ アニメーション：1K FILMS  
製作：ノーマン・プロダクションズ

出演：トニー・マラーノ aka テキサス親父 藤木俊一 山本優美子 杉田水脈 藤岡信勝  
ケント・ギルバート 櫻井よしこ 吉見義明 戸塚悦朗 ユン・ミヒャン イン・ミョン  
オク パク・ユハ フランク・クインテロ 渡辺美奈 エリック・マー 林博史 中野晃  
一 イ・ナヨン フィリス・キム キム・チャンロク 阿部浩己 俵義文 植村隆 中原  
道子 小林節 松本栄好 加瀬英明 他

上智大学 比較文化研究所 <http://icc fla.sophia.ac.jp>  
Institute of Comparative Culture Public Events 2017-2018  
[http://icc fla.sophia.ac.jp/html/events/e\\_2017-2018.html](http://icc fla.sophia.ac.jp/html/events/e_2017-2018.html)

ワークショップ 詳細

ICC/Japan Focus Workshop

Contemporary Crisis in the Asia-Pacific

12:00-18:00/ July 1st (Sat), 2017 /

Sophia University, Building 10, 3F, Rm 301 and 407

[http://icc fla.sophia.ac.jp/html/events/2017-2018/170701\\_Japan\\_Focus.pdf](http://icc fla.sophia.ac.jp/html/events/2017-2018/170701_Japan_Focus.pdf)

以 上